

随 想

日本末梢神経研究会の始まり —産業医大国際シンポジウム「職業性末梢神経障害」に続いて—

大西 晃生¹⁾, 矢部 裕²⁾, 祖父江逸郎³⁾

Peripheral Nerve 2014; 25(1): 121–127

はじめに

日本末梢神経学会は、平成26年度に第25回目の開催を迎えます。末梢神経研究会が、1990年（平成2年）に初めて開催されてから、四半世紀が経過しました。歴代の研究会・学会（第1～11回末梢神経研究会の後、第12～24回末梢神経学会と改称）の会長および理事・評議員ならびに開催担当施設の方々の高い見識と努力が積み重ねられました。平成10年代後半より、特に出席者は増加し、学会は着実に発展してきました。近年では、末梢神経疾患についての臨床・基礎・社会医学的な学際的検討・研究体制が構築されつつあることを、本学会を通じて知ることが可能となってきました。この報告では、末梢神経研究会の発足に至った経緯を記録すると同時に末梢神経研究会の機関誌「末梢神経」1990：1：57に記録された研究会結成の趣意書と同紙の巻頭言、「末梢神経」発刊にあたって、会長 祖父江逸郎を紹介することを目的としました。会員の一人一人の立場から、この報告が温故知新の契機になることを願っています。

末梢神経研究会の発足・研究会から学会への移行・発展

1987年（昭和62年）10月22～23日に、第7回産業医科大学国際シンポジウム「職業性末梢神経障害」が、土屋健三郎学長を会長として、産業医科大学ラマツィーニ講堂（福岡県北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1）で行われました。ご

存知の方々も多いと思いますが、ラマツィーニ（Ramazzini, B; 1633–1714, は、イタリアの医師で公衆衛生学と産業医学の先駆者）の銅像が、土屋学長の発案でその講堂の入り口の左側に建てられています。この国際シンポジウムは開学（1978年）後、1981年から毎年、産業・職業医学に関する特定のテーマのもとに、ラマツィーニ講堂で行われていました。すなわち、この国際シンポジウムは、初代学長の土屋健三郎先生が、産業医科大学というきわめてユニークな大学の存在を、世界にアピールし、かつ大学スタッフの更なる研鑽を促す産業医科大学の重要な行事の一つでありました。

1987年に土屋健三郎学長を中心とした第7回国際シンポジウムのプログラム委員会で、特に、「中毒性末梢神経障害」に力点を置いた「職業性末梢神経障害」をテーマとして、プログラムが組まれました。シンポジウムのプログラムの内容を資料1-1, 2, 3に示しました。シンポジウムは、K. TsuchiyaのOpening Remarksに始まり、2日間にわたる22題の演題の発表と討論が、指名された座長のもとで活発に行われました。最後に、S. HernbergのOverview Remarksで会を終えました。各Remarksと各演題の内容は、Journal of University of Occupational and Environmental Health (J UOEH) ; Supplement, 20th March 1988に報告論文として記載されています。講演内容の概略は、ヒト水銀中毒・鉛中毒の疫学的研究、トルエン曝露を受けた作業員・n-hexane多発神経障害者の臨床疫学

¹⁾ Akio OHNISHI：鞍手共立病院神経内科 [〒823-0001 宮若市龍徳554]

²⁾ Yutaka YABE：慶應義塾大学名誉教授

³⁾ Itsuro SOBUE：名古屋大学名誉教授

第7回
産業医科大学国際シンポジウム

「職業性末梢神経障害」

The 7th UOEH International Symposium
Occupational Neuropathy
University of Occupational and
Environmental Health, Japan

October 22, 23, 1987

Kitakyushu-shi

資料1-1 プログラムの表紙

的研究、アクリルアミド中毒・砒素中毒・n-hexane中毒の臨床例の検討、圧迫性・絞扼性末梢神経障害および職業性鉛中毒による末梢性神経障害の電気生理学的研究、職業性末梢神経障害における電気生理学的検査法の臨床応用と診断法、実験的鉛・有機水銀・アクリルアミド・酸化エチレンによる末梢性神経障害の病理学的研究、ヒト鉛中毒と動物の砒素中毒・有機水銀中毒・有機燐中毒における末梢性神経障害発症機序についての疫学的、臨床的、電気生理学的、生化学的、組織培養学的方法を用いた多方面からの研究報告でした。このシンポジウム直前に、メチル水銀中毒についての講演予定の椿 忠雄先生が急逝され、欠席されたことは大変残念でした。なお海外からの演者・座長は、Peter J. Dyck (Neurologist & Neuropathologist, USA), Lawrence F. Fine (Epidemiologist, USA), Sven Hernberg (Epidemiologist & Neurotoxicologist, Finland), Austin J. Sumner (Neurologist & Neurophysiologist, USA), John B. Cavanagh (Neuropathologist &

Neurotoxicologist, United Kingdom) の 5 名 (プログラム順) でした。

シンポジウム終了後の会長招待のパーティーで、祖父江逸郎、後藤幾生、米澤 猛、橋本和夫、村井由之、祖父江 元、大西晃生らが、将来、「中枢・末梢性神経疾患・障害などを対象とし、より幅広い領域から検討する学際的な研究会・学会を、日本で創立しては如何か」という話題が浮上しました。また、荒記俊一先生から産業医学領域からも是非参加したいとの要望もありました。しかしながら、その際およびその直後には、実際にどのような会を、どのように立ち上げるかについては、具体的に検討・実行されるに至りませんでした。その後、祖父江逸郎を中心に、神経学会などの機会 (1988～1989) を通じ、古和久幸、西谷 裕、矢部裕、佐藤勤也、平澤泰介、桜井 実、橋本和夫、竹内康浩、植村慶一、大西晃生らが連絡をとりつつ、末梢神経研究会 (当時の仮称) 創立の必要性とその意義を検討し設立に向けて準備を進めました。その結果、「末梢神経疾患の内科・外科的側面と社会・産業医学的側面に加え、末梢神経に関する基礎神経科学的側面を含む幅広い領域の会員による学際的な会の結成が重要である」との認識に至りました。さらに、会の活動を末梢神経疾患の治療、リハビリテーションおよびその予防の領域まで広げて、会の活動と成果を患者のみならず末梢神経疾患を発症するリスクのある方々にも応用出来ることが重要視されました。

当時、外科系では末梢神経に関する研究は、主に日整会や日手会で発表されており、特に日手会における末梢神経に関する発表演題数は極めて多く、また、日手会に付属する形で「末梢神経を語る会」が設立されて10年を超える歴史がありました。別に末梢神経外科研究会を発足させようか、などという意見もありましたが、津山直一教授の「末梢神経を研究したい人が一堂に会して討論するのは、良いことではないですか」の一言で末梢神経研究会創立・結成が決まりました。

産業医科大学での国際シンポジウム開催から2年余り後の1990年 (平成2年) 1月、「末梢神経研究会」の結成の提唱と関係各位のご参加

CONTENTS

Opening Remarks

Kenzaburo Tsuchiya

Chairman Ikuo Goto

Acquired Neuropathies: Overview and Mechanisms in Acute and Repeat Nerve Compression

Peter J. Dyck 1

Chairman Toshiteru Okubo

Epidemiological Challenges for The 1990's: Exposure Assessment, Exposure—Age Interaction, and Subclinical Health Outcomes—An Illustrative Example—The Delay Effects of Mercury Exposure

Lawrence J. Fine 17

Chairman Peter J. Dyck

Occupational Neuropathies in Japan

Itsuro Sobue 33

Chairman Sven Hernberg

Lead Neuropathy in Workers in Japan

Shunichi Araki 55

Electrodiagnostic Features of Lead Neuropathy

Austin J. Sumner 65

Experimental Lead Neuropathy

Peter J. Dyck 73

Effect of Inorganic Lead on Cultured Schwann Cells

Gen Sobue 91

Chairman Kazuo Nomiya

Toxicological and Metabolic Aspects of Arsenic Poisoning

Noboru Ishinishi 97

Arsenic Neuropathy

Michiya Ohta 107

Toxicological and Metabolic Aspects of Organic Mercury Poisoning

Hitoshi Takahashi 117

The Pathogenesis of Experimental Methylmercury Neuropathy

John B. Cavanagh 127

Chairman Itsuro Sobue

Electrophysiology of Occupational Neuropathies : Methods, Pitfalls, and Clinical Applications

Austin J. Sumner 135

Chairman Takeshi Yonezawa	
The Metabolic Basis of Toxic Neuropathies	
John B. Cavanagh.....	141
Chairman John B. Cavanagh	
Tissue Culture Analysis of Neurotoxic Materials	
Takeshi Yonezawa	155
Chairman Mitsuo Iida	
Neuropathy Due to Industrial Organic Solvents:	
Dose-Prevalence Relationship in Subjective Symptoms	
Among Toluene-Exposed Workers	
Masayuki Ikeda.....	173
Chairman Masayuki Ikeda	
Acute Neurobehavioral Effects of Toluene and	
Ethanol in Humans	
Lawrence J. Fine	185
Long-Term Survey of n-Hexane Polyneuropathy in The	
Sandal Factory	
Mitsuo Iida	197
Chairman Junichi Misumi	
Toxicological Aspect of Acrylamide Neuropathy	
Kazuo Hashimoto	209
Acrylamide Neuropathy	
Hideki Igisu	219
Ethylene Oxide Neuropathy	
Akio Ohnishi	229
Biochemical Neurotoxicology of Organophosphate Poisoning	
Morifusa Eto	243
Chairman Makoto Futatsuka	
Neuropathy Due to Physical Factors	
Masamitsu Ijichi	255
Chairman Yoshiyuki Murai	
Overview Remarks	
Sven Hernberg	263

資料 1 - 3 プログラム (page 2)

とご協力をお願いする趣意書(資料2)が配布されました。趣意書の発起人として、【神経内科学】祖父江逸郎(代表発起人)、里吉宮二郎、豊倉康夫、中西孝雄、田代邦雄、萬年 徹、高

須俊明、古和久幸、高橋 昭、柳澤信夫、西谷裕、木村 淳、高橋和郎、後藤幾生、大西晃生、【整形外科】津山直一、矢部 裕、【小児科学】福山幸夫、【糖尿病学】後藤由夫、【産業医学】

趣 意 書

最近の神経科学の急速な進展に伴い、末梢神経疾患における臨床および社会医学の飛躍的な進歩が期待されています。末梢神経疾患の頻度は高く、その診断、治療、リハビリテーションおよび予防に関する患者、家族の関心度も年々高まっております。末梢神経疾患の原因は遺伝、中毒、代謝異常、炎症・アレルギー、外傷・圧迫など多岐にわたりますが、これら原因究明のための基礎神経科学的研究は進歩につれて専門・細分化され、その成果を末梢神経疾患の臨床および社会医学に還元・応用することは容易ではありません。

末梢神経疾患の領域においても学際的な研究体制が今後ますます重要視され、種々の立場の専門家の協力と自由な意見交換が特に臨床および社会医学の発展には重要であります。これまで我が国では、文部省科学研究費補助金総合研究班、厚生省精神・神経疾患委託研究費による末梢神経疾患研究班を中心にして国際的にも輝かしい業績が数多く発表されてきました。しかし、将来の飛躍的な末梢神経疾患の研究の発展のためには、さらに学際的で自由な研究発表と討議のための適切な場を創造することが必要であります。

これらのことを勘案して、発起人一同の討議の結果、ここに新たな組織として「末梢神経研究会」を結成することを提唱し、関係各位の御参加と御協力をお願いする次第であります。

平成2年1月吉日

発起人一同

・代表発起人 祖父江 逸郎

・発起人	祖父江逸郎	里吉 啓二郎	豊倉 康夫
	中西 孝雄	田代 邦雄	萬年 徹
	高須 俊明	古和 久幸	高橋 昭
	柳澤 信夫	西谷 裕	木村 淳
	高橋 和郎	後藤 幾生	大西 晃生
	福山 幸夫	津山 直一	矢部 裕
	後藤 由夫	荒記 俊一	橋本 和夫
	竹内 康浩	池田 正之	村井 由之

「末梢神経」発刊にあたって

末梢神経は中枢神経と末梢組織との間にあって両者を結ぶ重要な機能的役割を担っている。末梢神経障害をきたす要因には、遺伝、中毒、代謝異常、炎症・アレルギー、外傷・圧迫などがあり、これらの要因による病態は多様で、それぞれに特徴がみられる。実際の臨床では、これらの要因や病態が明確に鑑別可能な場合もあるが、困難なことも少なくない。障害要因の重なりもあり、実態はより複雑である。

最近では、分子生物学的技術、免疫化学的方法、電気生理学的手法、微細構造の解析など、種々の手技の開発により、診断精度が著しく向上し、また病態の詳細な解明に伴い適確な治療の開発が進み、さらに、リハビリテーション、福祉面でも著しい進展がみられる。しかし、まだ、臨床的には原因や病態を明確にし得ないものも多く、治療面においても多くの課題が残されている。

こうした現状からして、末梢神経疾患領域においても、各専門分野を統合した、より学際的な研究体制の確立が重視されるわけで、その実現をはかるため、研究成果の発表や自由な意見交換の場が是非とも必要である。それに対応するため、末梢神経疾患領域に関心を持っておられる多くの専門家の発議により、「末梢神経研究会」を設立することになった。第1回研究会は、平成2年9月1日名古屋で、第2回研究会は、平成3年8月31日東京において開催され、神経内科学、整形外科学、リハビリテーション医学、小児科学、産業および環境医学、糖尿病学のほか、解剖学、生化学、生理学、薬理学、分子病態学、免疫学、などを含む神経科学の分野の多くの専門家による総合討論が行われ、大きな成果が得られた。

第1回研究会では Peter James Dyck 教授の “New approaches to assess the prevalence, risk factors and treatment in peripheral neuropathy” と題した特別講演が行われ、第2回研究会では、末梢神経の修復と再生についてのシンポジウムで、Dr. Rhona Mirsky による “Axonal and other influences on Schwann cell phenotype”, Dr. Pierre Morell による “Biochemical bases of some model toxicant induced neuropathies”, Dr. G. H. DeVries による “Peripheral nerve injury-induced mitogens and trophic factors and their potential role in peripheral nerve regeneration” が発表され、国際的な交流を通じて大きな成果が得られた。

研究会での発表を記録にとどめると共に、関連領域をも含めて、より多くの方々にも参考にしていただくことを目的として、今回本研究会機関誌「末梢神経」が発刊されることになった。巾広い領域で活用されることを期待し、今後の益々の発展を希望する次第である。

平成4年4月

末 梢 神 經 研 究 会

会 長 祖父江 逸郎

荒記俊一、橋本和夫、竹内康浩、池田正之、村井由之の方々が賛同されました。趣意書を踏まえて、末梢神経研究会会則（末梢神経 1990：1：59-60）が作成されました。さらに学際的な研究会にふさわしい末梢神経研究会役員【会長、監事（内科系から各1名）；幹事9名（基礎医学系1名、産業医学系1名、外科・リハビリテーション医学系4名、内科学系3名）；世話人124名（これに対して基礎医学系12名、産業医学系5名、外科・リハビリテーション医学系30名、小児科学系4名、内科学系73名、ただし前記の会長、監事を含む）】が選ばれました（末梢神経 1990：1：58）。

1990年9月1日（於名古屋）に、第1回末梢神経研究会が祖父江逸郎会長のもとに開催されました。以後、毎年一回、8月下旬ないし9月初旬に開催されることとなりました。なお、第1回末梢神経研究会での発表演題内容は、1992年（平成4年）7月1日発行（第2回末梢神経研究会の翌年）の研究会機関誌（末梢神経；Peripheral Nerve; ISSN 0917-6772）に記録されています。この巻頭言では、「末梢神経」発刊にあたって、と題して、将来の飛躍的な末梢神経疾患研究の発展を図り、末梢神経疾患の新しい診断・治療・予防法の開発などを学際的・multidisciplinaryに行うことが強調されました（資料3）。

第2回末梢神経研究会（1991年）は東京で、古和久幸会長のもとに、第3回研究会（1992年）は京都で、西谷 裕会長のもとに、第4回研究会（1993年）は福岡で、村井由之会長のもとに開催され、演題は神経内科学、整形外科科学、基礎神経科学、産業医学関連領域の演題な

どが発表されました。第5回研究会（1994年）は東京で、矢部 裕会長のもとに、第6回研究会（1995年）は京都で、平澤泰介会長のもとに開催され、特に、第5、6回研究会以降、整形外科領域からの末梢神経疾患の基礎的および臨床的な研究の発表が増加し、神経内科医と整形外科医との直接討論が頻繁に行われるようになりました。この後、ほぼ隔年で内科系（糖尿病学、産業医学を含む）と外科系が会長を担当して、研究会を開催する原則がほぼ確立しました。各研究会で、産業医学関連の講演または産業医学講座の講演が重要視されているのは、前記のような本会結成の最初の経緯を踏まえたことによります。

なお、2001年（平成13年）から、研究会は発展的に学会へと組織替えすることになり、名称も変更・改称されました。2000年後半に末梢神経研究会事務局（産業医科大学神経内科内）は、末梢神経学会事務局（名古屋大学大学院医学研究科神経内科内）へと変更になりました。

終わりに

本学会の発足の経緯から分かりますように、本学会は末梢神経を研究対象とする多くの領域による学際的な組織として運営されているユニークな学会で、これまでに多くの成果をあげてきました。今後さらなる発展が期待されております。本会会員の活動が、特に末梢神経の変性、修復、再生に関する研究に大きく寄与し、その成果が末梢神経疾患・障害を病む方々に、日々還元・応用されてゆくことを願っております。